

アートフィールドウォーキングガイド

2017 vol.5 (通巻 385号)

ギャラリー

5

GALLERY

[私の10点] **横尾忠則**

小川英晴の新アート縦横 No.16 **土方明司 × 江尻 潔**

5月の全国美術展【美術館/百貨店/画廊】スケジュール&マップ

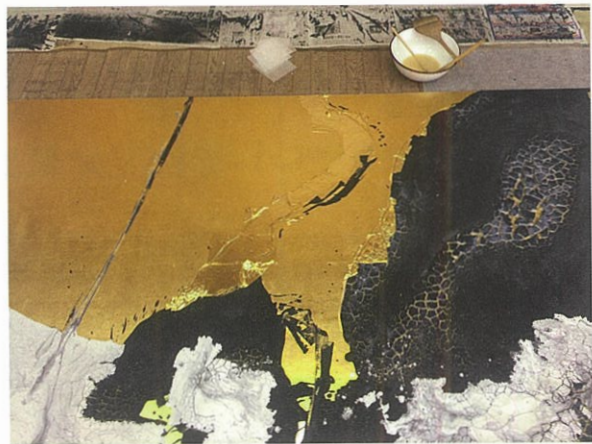
My Favorite Tools

2

画家の道具

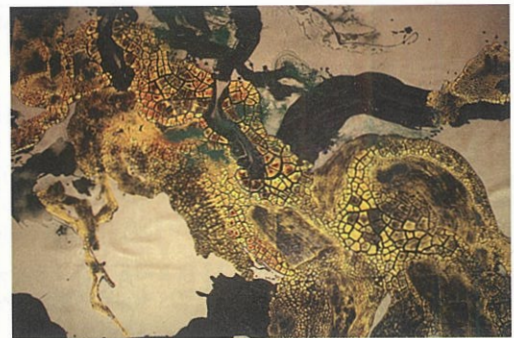
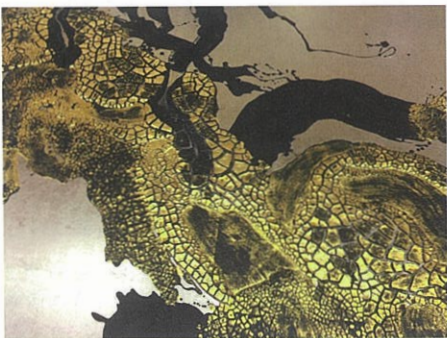


菅原健彦
箔



新 たな日本画表現に挑み続ける作家の一人、菅原健彦。墨と筆をベースにした独自の技法で、主に桜樹をモチーフとした作品の制作を続けている。今回の「My Favorite Tools」箔は、学生時代から扱っていた画材で

あるが、フランスのギャルリーためながパリで行われた2012年の個展以降、異なる視点で扱うようになったのだ。「ヨーロッパの中で自分の水墨の作品を見た時、物足りなさを感じました。水墨だけ



ではだめだろうという思いは直感的にありました。水墨で勝負するならば、常識を見直し、今までの概念とは異なる作品を制作しないとけない。水墨との相乗効果を最も期待できる画材が金箔でした」

箔は、作品に装飾性、強靭さを作品に持たせるためのベースになるという。当初は金箔の上に水墨で描くというように両者を別けて捉えていたが、今はひとつの自分の技法として考えているという。金地に水墨という日本の伝統的な作品から、菅原の眼は現代へと向けられた。

「本音を言えば水墨だけで制作したい。でも、今はそれでは勝負にならないと思います。例えば、マティスやピカソが墨でドローイングした作品を水墨画と呼ぶでしょうか。日本画や現代美術といった言葉もそうですが、そうした固定観念とまずは向き合わなければいけない。そして、

概念を覆すような作品をつくるしかないのです」

ギャルリーためなが大阪で、4月23日まで行われている個展「響—resonance—」のメインとなった松をモチーフとした大作には、金箔の他、プラチナ箔も用いられた。特別意図したものではないというが、やはり菅原の新たな挑戦の側には箔があるということだろうか。今年は展覧会の予定はもうなく、次に向けた取材期間に入っている菅原は、次にどのような展開を見せてくれるのだろうか。

